ビブリア No. 27

発行　いわき市平上荒川字長尾30
　　福島工業高等専門学校
編集　図書委員会
　　昭和52年11月8日

福島高専 図書館報

学生にとっての

読書の秋・思索の秋

古典と現代

まえがき —若者にとって読書とは—

皮肉なことに，若者にとって，日本および東洋の古典ほど，近寄り難いものはないらしい。それでいて，彼等は，外国人か国際人かと問われれば，異口同音に日本人だと答える。彼等の日常の行動様式をみれば，まさに〝日本人〟そのものである。意識や観念の上では，たとえ外国志向であっても、行動や決断の場になると，土着的日本人なのである。

だから，彼等が少し意識して勉強をしはじめると，ぶつかるのが，この日本および東洋の心なのである。この問題を，自分なりに結論づけておかなければ，彼等はおそらく前へは進めないであろう。

日本の学校制度やカリキュラムを検討すると，まだまだ物質崇拝に裏づけられた欧米文化への傾斜がめだっている。私は，古風な精神主義や懐古主義を唱える気持は毛頭ないが，いまのまゝで良いとは，これまた言えない心境である。

学生諸君にとって，精神がまだ柔軟さを失っていないこの時期に，素直な心で，東洋の古典にふれてみることが，大切なのではなかろうか。

以上の観点から，今度のビブリアは，仏教と儒学に関係のある感想文を載せてみた。筆者の個性に従って，人生論風，学究肌，ヤブニラミ型などなど，色々なタイプの文章が並んでいる。思素への道は，一本に限らない。ハイウェーも良し，木蔭の道も良し，途中に泥沼があっても良いではないか。各人が，自分にとって最も歩きたいなと思う道を通っていけば良いのである。

以上4年生の感想文とは別に，池田先生から，1年生の夏休みの読書調査の報告という貴重な原稿をいただいた。この調査報告の数字が物語る1年生の精神生活の実態にも，われわれは注目しなければならない。上級生の読書傾向と対比してみれば，どういうことになるのか。その次も知りたい，というのが編集子の切なる願いである。

芋　川　平　一

一本の綱

―宗教というものについて―

4E　小宅広幸

1. はじめに

高専に入って2年めの夏ごろからであったと思う。そのころ，海外放送を聞くこと（BCL）が流行となり，私もそれを聞いていた。そこには，キリスト教が熱心に語られていた。これが，私が能動的に宗教と対した最初であった。それ以前はと言えば，まず，家には仏壇があった。この仏壇にかかわる創価学会というものは厭わしい限りであった。ありがた話をしている人には，その話のバカバカしさから軽蔑感すら沸き上がった。「この科学の時代に……」とも思った。

キリスト教に関心を持ち始めたころの私は，精神的に一番不安定な時期にあったと思う。宗教は人生の逃げ道だと思っていた私が，とにかくこれに飛びついた。宗教に生きるための力であってほしかったのかも知れない。

3年の時，倫哲の発表テーマにマホメットを選んだ。世界3大宗教の一つであり，キリスト教との違いについて知りたかった。いや，私がキリスト教に満足できなかったのかも知れない。ラジオから聞こえる声もその場を離れれば，すぐさめてしまったのである。

これも3年の時であるが，梅原氏の日本文化論，その他いろいろな人の日本人論を読んだ。そして，キリスト教も曲り角に来て，かなり前から仏教が見直されていることを知った。私は仏教的慣習の中に生活していながら，それ自体を全く知らなかった。ひとつ仏教に足をつっ込んで，何も知らずに厭わしがっていたものを見てやろうと思った。この仏教までを一区切りとして宗教に対する自分なりの態度をはっきりさせてみたくなった。西のキリストと東の釈迦を有機的に結合させる手掛かりでも見てみようと思った。

2. 宗教というものについて

キリスト教と言えば，知らない人はいないであろう。この宗教に接し，実際に聖書を読んでみたが，どうも愛を重要視することから来る曖昧さと，2000年近くもの神の沈黙に納得がいかなかった。「信じれば救われる」という簡単な言葉の裏にある宗教的意味は近ごろ仏教書を通してわかりかけて来たが，見返りに幸福，安楽を求めているところが我慢できなかった。他の宗教ではどうなのだろうかと思って，見先をイスラム教に変えた。

マホメットによる回教は，戒律に厳しく緊張した雰囲気をもつ宗教という感じがする。ところが，宗教的生活の目的に見返りを期待することは，キリスト教以上であった。イスラム教はアッラーの神を信奉する宗教である。マホメットはユダヤの民の神を人類すべての神としようとしただけで，本質的にはキリスト教もユダヤ教も回教も同じ神を信奉しているのである。（イスラム側から言わせれば，キリストは神ではなく，予言者の一人である。）が，この両教の間に昔からイザコザが絶えない。聖戦という考えがあって，宗教的正義の名のもとに戦争をすることに対し，矛盾を感ぜずにはいられなかった。真に正しい宗教がこのいづれかにあるならば，聖戦と称する戦争を認めることになる。そこで，西に向けていた目を東に向けることにした。東とは当然仏教のことである。

仏教は，キリスト教や回教とちがって異端が発展してきた宗教である。いろいろな宗派に細分化してきたが，その根は仏陀である。仏教には，一見冷やかな，鋭い自己観察がある。人生論によくある対立した解答を前にしたときのようなジレンマがある。このジレンマに，もうどうにもならなくなったとき，一種の開き直りがジレンマを抜け出す糸口になることがある。この開き直りが深い意味をもつような気がする。

ある人間がいる。彼は苦悩と戦い，この状態から抜け出そうとする。結局のところ，彼は自分以外のところに絶対者を立ててこの絶対者に身をまかせるか，そうでなければ，自分を神の地位まで押し上げなければならなくなるだろう。どちらが良いのか私にはわからない。神を信じることに賭けたパスカル。神を殺したニーチェ。宗教に接すると，哲学にもよく接する。宗教は古代から人間への問いである。そして，宗教は必要とされたとき偉大な力を発揮する。強さがあるのだ。

3. むすび

信念をもって生きられること。それが理想である。宗教は，そのヒントを与えてくれるものだと思っている。とはいえ，私にはキリストもマホメットもブッダも結局のところ理解できなかった。本質的なことは何も知らない。さらには宗教が何故必要かということもわからないのが現状である。だから私は，ここで結論を出そうという早まった考えを捨てて努力して行こうと思う。この3本の糸にもっと多くの糸をからませて行きたいと思っている。私はこの糸を一本の綱としたい。

仏陀にはなれなくとも ゴータマ＝シッダッタには

4E　和田裕明

お釈迦様については誰もが多かれ少なかれ興味を持っていると思う。私もその例外ではなく，以前から彼についていろいろと知りたいと思っていた。けれどもいつもそう思っていただけで，実際に調べてみることはできないで今まで過ごしてきた。それが4年生で発表する倫哲発表のテーマを知らされたときに，この「釈迦」というテーマがあることに気がつき，これはちょうど良い機会だと思ってこのテーマを選んでみたのである。「釈迦」のところは私を含め4名で発表することになり，私は解脱を受け持つことになった。

このようにして，解脱の発表を目的としてではあるが，念願の釈迦について調べることになった。解脱，これはまず他の四諦説，縁起説，八正道，中道などをよく理解した上でないと，とても発表はできないと思い，早速，参考書を購入して釈迦の生涯と彼の思想について一通り調べてみることにした。

ところが，彼の思想のところで，最初から彼の思想の最も根本となる「苦」というものに疑問を感じてしまい，なかなか捗らなかった。誰もが持つような疑問なのだが，それは仏陀が「人生はすべて苦である。」と説いたところである。このように言われれば当然のごとく，なぜ人生がすべて苦なのだという疑問が湧いてくる。たしかに人生には苦しいことは数多くあるけれども，逆に楽しいことだってあるのである。心ある多くの人たちは，今は苦しいけれどこの苦しみに耐えて努力すれば，いつかは「楽」を得られると信じて生きているのである。それを「人生はすべて苦である。」という一言で初めから「楽」ということを否定されてしまったものだから，初めのうちはどうしても納得がいかなかった。とは言っても，彼の言う「苦」ということが全くわからなかったわけではなく，何回も教科書や他の参考書を読んでいるうちに，彼の言わんとしているところはわかってきた。しかるに，人間の体験することはすべて苦だから人生はすべて苦であるとなると，なんとなくひっかかってしまうのだ。

だが，この疑問は法（ダルマ）を調べているうちに消すことができた。世の人々は人間のあるべき姿，人倫の規範という人間の理法に気がつかず，永遠常住の我があると固執しているから苦悩に沈むのである。いろいろな人間の煩悩は生存の根底にある妄執に基づいている。この妄執のために人々は業（ゴウ）をつくり，その結果として迷いの生存，すなわち輪廻に流転するのである。仏陀は迷いながら何回も輪廻して生存することはまことに苦しいことであるから，早くこの人間の理法に気がついて輪廻から解脱しなさいと世の人々に言いたかったのだ。だから彼は最初から「人生はすべて苦である。」と説いたのだと私は理解した。

次に中道について考えてみる。解脱を目的とする修業者たちは快楽と苦行のどちらにも専心してはならず，その両極端をしりぞけ，不苦不楽の中道が彼らのとるべき道だと仏陀は説いた。なにゆえ彼はこのようなことを言ったのか。それは彼の体験からきていると私は思う。出家以前の彼の生活は決して幸福の少ない生活ではなかった。父シュッドーダナ王に彼は春夏冬の三季節にふさわしい三つの宮殿を建ててもらい，衣食も当時としては最高のものであったろう。にもかかわらず，彼は人間の老い，病み，死などの苦悩について考えていたという。彼は年もいかないうちにすでにこの華やかな幸福（快楽）の多い生活に疑問を抱いていたのだ。出家後，彼は6年もの間苦行を行った。肉体を苦しめることによって精神的自由の境地に達しようと死に直面するまで苦行をしてみたが，結局目的を達しえなかった。そこで，快楽もダメ，苦行もダメだと結論をくだした彼は体力の回復後，一人で快楽でもない苦行でもない瞑想をして，ついに仏陀たる自覚に菩提樹の下で達することに成功した。このような体験が彼に中道なる道を悟らせ，その中道を歩むには八正道を実践することだと考えさせたのだろう。

ここで，なぜ中道と八正道とがイコール関係にあるのかと言えば，それは解脱なる境地を悟るまでに彼が八正道を実際に歩んできた己に気がついたからである。八正道の八つの道をよく考えてみればよくわかると思う。八つの道のうち，初めの〔正見〕から七番目の〔正念〕までは八番目の〔正定〕にいたる予備段階にすぎない。彼はその予備段階を幼年時代から苦行時代までに，すでに達成してしまっていた。それゆえ，苦行をやめてから一人で瞑想して仏陀になりえたのである。

さて，いよいよ解脱についてであるが，中道，八正道などを調べてみると，まず解脱とは我々にはとうてい到達しえない境地であるということが思い知らされた。第一，我々は八正道の第一段階の〔正見〕すら場合によっては満足にできないのだから。授業で解脱について発表したが，その時，解脱とはこれこれこのような境地で，このような方法をとればできますよと言ったけれども，自分で実際に解脱したわけでもないの

で，ただ本に書いてあったのを読んで解脱とはこういうものなのかと活字の上から私なりに感じたことを話しただけである。しかし，それだけでもこの解脱を通じて彼の思想，さらに，あまりにも間接的なために臨気ではあったけれども，念願の釈迦という人間に触れることができたことは大きな収獲であったと信じている。

私がなぜ発表のテーマに「釈迦」を選んだかについては冒頭に述べた通りである。己自身を高められるだけ高めたいという思いから，以前から釈迦の人格，人間性などを自分の手本にしてみたかった。釈迦の思想を通じてこれらのことを知ることができればと思い，自分の発表に解脱を選んだのも，他のことがすべてこの解脱に通じているという理由からである。そしてその結果，私が感じたゴータマ＝シッダッタは外見は平穏でおとなしい人ではあるが，内には何か燃えるものを秘めていた人物，そのためか意志も非常に強い人物，そのような人物に思えた。むろん，私は彼に直接会ったことはないので想像することしかできない。しかし，調べたかぎりでは，我々の考えている理想の人間像を持ち合わせた人物であったようである。

彼を師とするかぎりは修業者にならなければならないのだろうか。私は必ずしもそうでなければならないことはないと思う。予備段階である八正道の第七段階の〔正念〕までは誰もが心掛けしだいでは達成できうると思う。従って仏陀には私はなれないが，ゴータマ＝シッダッタには少しでも近づけうることを確信した。

〔八正道：正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定（正しい瞑想）〕

親　鸞

―その魅力と反発―

4土　大　平　恭　二

〈PROLOGUE〉

親鸞の発表を終え，彼の一生のほんの一部分を追った事で私の胸の奥に残ったものは何であろうか……

私には思想とか宗教といった事柄は，まるで自分には関係のない大それたものであるかのように，あまりに大きすぎてその一部たりとも把握できないに違いない。しかし歴史の教科書で名ばかり知っていた時と，こうして年譜の発表のために彼の生涯をたどった後では，親鸞に対して持つ感情の進展を否定することはできない。

我々は，過去の偉人の生涯を調べると，どうしても現在の自分達の生き方と比較してしまう嫌いがある。それは当然の事ではあるが，比較の時点で注目せねばならないのは個々の事実における時代背景である。

親鸞の生きた時代はどのようなものであったか……最もポピュラーな言葉を持って表わすならば，"激動の世"であった。政治と宗教（仏教）の固い結びつきによる支配のもとで，戦乱と飢饉に苦しむ農民をはじめとする下層階級の人々が，現世で得ることのできない安泰とか幸福といったものを"あの世"に求めた。そんな時に皆の眼前に灯をともしたのが，親鸞をはじめとする新仏教の教祖たちであった。

何の苦労もなく，脅威にさらされることもなく，ただ流れゆく時に任せてノンベンダラリと暮らしている我々が，真の意味で彼の思想・本願のありがたさといった一連の親鸞の教えを理解することは，まず無理に違いない。しかしながら先にも述べた通り，我々は書物を通して彼の生きた時代をほんの少し垣間見ることが出来るので，本当に当時の人々の生活を知ることができないまでも，想像の中にわが身をおいて，親鸞という一個の人間について考えようと思う。

〈MAIN　ISSUE〉

本題に入る前にひとつ述べておきたい事がある。それは親鸞がまだ自分の生きる道を見出す前に受けた夢告とか示現とかいう"非科学的"な事実についてである。私が読んだ2冊の本には，いずれもこのことについて詳しい説明が載っておらず，何とはなしに書き過ごしてしまっているが，少々気になったので私の考えを記してみようと思う。

私は彼等（夢告を受けたのは親鸞に限らないので複数にした）のようにお篭りの経験もないし，御仏との"会話"という境地に立ったこともないから断言できないが，それはおそらく方々から入ってくる情報を頭の中で整理し，自分の進むべき道を決めかねている時に，次第にひとつの方向へむかい，自己暗示の形で表われるのだと思う。いくつかの他の事実のように，本人あるいは思想の後継者がその教祖の生いたちをリアルなものにするための作り話であるとは考えたくない。

さて親鸞はわずか9才にして仏門に入ったわけだが，延暦寺でいわゆる"修業"を積んでいる間に，当時の腐った仏教に対して憤りを感じ，成長するにつれて自分の考えが確かになってきた。新しい道を考え，迷い苦しんだあげく29才にしてついに法然のもとへ降りた。

私がこの叡山時代で大いに感銘を受けたのは，彼がおのれの何たるかを知った点である。同じ僧徒の誰もが善い人間であることに執着を持ち，そうなる事に努力する中で，自分は，いや人間は常に煩悩のままに動く生き物であることを悟ったのである。そして彼はそうであるが故に苦しみ，苦しみ抜いた末に煩悩具足の我等を助けてくれるという弥陀の救いに心を傾けた。

後に数々の苦難を経て布教に尽くす親鸞もまたすばらしい人間像であるには違いないが，私はこの出発の時点こそ親鸞を知るポイントだと考える。

悩み苦しみの末におのれの進むべき道を知ること，いやそれ以前に"おのれを知ること"……人間にとってこれより重要なものは無いのではないだろうか。

親鸞の偉大な点は，それ（自己の本質を見きわめたこと）にとどまらず，そのような心境に達しない人々を説き，同等な利益の恩恵を与えてやろうとしたことである。

数えきれない迫害を受け，流罪に処され，あげくの果てに師を失い，たったひとりになっても布教を続ける親鸞は，ひたすら弥陀の救いを信じたがために遂行できたというが，私はそれよりも一個の人間としての精神力の強さを讃えたい。

そんな親鸞にも迷いの時期があった。助業とされ，自身でも嫌っていた事柄のひとつである三部経の読誦をしたのである。正直云って私は，この事実を知って内心ホッとしたのであった。布教活動に専念する彼が思想家としてあまりに完璧すぎていたのが，飢饉に苦しむ農民を目の当たりにして，果たして自分の教えが本当に人々の生活を支えることができるのか，という本来の人間性をとり戻したのである。そして私はここに，思想家はやはり人間の生の上に立っているものであると改めて教えられた。

話は一気に先へとぶが，親鸞は84才にして，自分の教えをあやまって民衆に広めようとした長男の善鸞を義絶している。はじめ私は，何もイイ年をしてこのような大事を起こすこともあるまいと思ったが，その本質に触れてみると，思想家としての若さの不滅ということより，偉大な"思想の追求"の重さに心を打たれる思いがした。

親鸞の思想の全体系の裏づけとなるものと云えば，とりもなおさず悪人正機の考え方である。そしてまた，本当に理解するには長い時間が必要であると思われる。何しろ，歎異抄第三条に記されたこの文章は，冒頭から「善人でさえ往生できる。まして悪人は。」という強い言葉を放っている。通常の考え方を根本からひるがえしているのである。法然のもとへ通いはじめた頃の親鸞のように，私はなぜか，なぜかと問い続けたが，今になっても心にはっきりとした解答は浮かんで来ない。ただ，この悪人正機の中でいう善人とは，ふつうの"よい人"を意味するものではない。詳しい事は省略するが，宗教的意義があるのである。悪人が悪いことをしてわがまま放題に生き，それで往生できるとも言っていない。おのれを悪人と認め，自分の往生を弥陀に任せきるときに，それが約束されるのだと説いている。私はここで反発を感じた。自分を悪人と認識できたならば，もはやその人間は悪人ではないのではないだろうか。悪人の悪人たる所以は，自分の犯した罪に対する意識の無いところにあると思う。そういうことでは，自分を善人と思い，おのれの向上にのみ尽くす者こそ悪人ではないのかと思う。

ひょっとして親鸞の悪人正機は，このようなことを指したものだったのかもしれない。

ところで，親鸞は妻帯という旧仏教の考え方の打破のみならず，いかに当時珍しくないとはいえ二重結婚までしている。そしてまた"女犯の偈文"なるものをも公表している。"女犯の偈文"の内容で「行者が女性と交わりをもつことがあっても，わたしが相手の女性の身となって肉体の交わりを受けよう。」という観音菩薩の言葉を受けた，とあるが，私はこれを読んで胸がむかついた。何と自分に都合のよい示現を受けたものだとつくづく思った。二重結婚にしても，最初の妻のことは後の記録には微塵も残っていない。その女性はどうなってしまったのだろうか。

思想家として立派な親鸞も，その私生活においては共鳴できないところが多大にある。私が百パーセント親鸞を尊敬しかねる理由である。

話が思想という主題の領域を越えはじめてきたので，このくらいで MAIN ISSUE のペンを止めておく。

＜EPILOGUE＞

誰かが云った。親鸞の教えはキリスト教に似ていると。人間の認識に始まり，神仏を通して来世を説くという共通性からも，その教えに同じところが表われて当然のことだと思う。

ただ私は，西洋と違って，自分達の先祖が実際に生きた日本という同じ土地に根を生やした仏教の方が，生活に密着しているためか調べるにも興味をそそられた。

思想は国籍を越えると人は云うが，私はあえて反論する。思考ほど生活環境に左右されるものはないと信じているから。

親鸞の生涯を追って私の得たものは，結局何であったのか。ひとりの人間の生きざまを知ったこと。そし

て彼もまた我々と同じ人間であったこと。……今紙面にはこれだけしか書き表わすことができない。

最後に，私が読んだ本のうちの一冊の中に心に残った文章があったので，これを記してペンを置く。

「親鸞は机の上の学者ではなく，体験の中で苦しみぬく“思想者”である。」（古田武彦）

必読書・愛読書としての論語

4E　長谷川　広　樹

論語は，僕たちより一世代上の人たちにとっては少年時代の必読書であった。漢文を読むテクニックをおぼえるほかに，人間としての良識・常識などをまなぶことが大きな目的であったのはいうまでもない。

しかし，僕たちは論語を知らない。もちろん，ギリシャの昔からの西洋の典籍を学ぶことは悪いことではない。僕たちとは本質的にちがう西洋の人間を理解し，全人類的な立場の上でものを考える必要のある現代では，ますますその必要性が高くなってくるであろう。しかし，それと同時に大切なことは，すでに十分手あかのついた，そしてしばしば棚ざらしにさえなっている東洋の古典を，新しい角度から読みなおしてみるということでなければならない。特に論語などは，長い間，僕たち日本人の精神の中核をなしていたものであって，僕たちが意識しようがしまいが，僕たちの心の中にがっちりと根をはっているものだから，「自己反省」の意味からいっても，一度あたってみる必要のある古典なのである。

論語にしるされている孔子の言動はきわめて平凡にみえるが，その平凡さに徹したところに彼の偉さがあるともいえる。世の思想家とよばれる人たちの中には大言壮語とまではいかなくても，極端な議論をするものが多い。それに対して，論語を通読してみてまず気がつくのは，あたりまえのことしか書かれていないということである。むろん素直にうけとりにくいいくつかの箇所はあるけれども，孔子のいう「仁」さえもきわめて素朴で当然のことと考えられるのである。そしてこのように考えられること自体に，孔子の偉大さがあるのではないか。論語は三千五百年もむかしの書物である。そして孔子は中国の人である。生まれた時代も生まれた国も全く意識させないところに孔子の人格が存在するのだと思う。では一体，孔子の人格とは何かというと，まず論語の中の文章は非常にみじかいものが多い。そして論語自体が孔子が折にふれてもらした断片的な言葉をあつめた格言集のようなものだから，そんなものはえてして無味乾燥なものになったり，奇をてらったり，あるいはちょっと気の利いたうすっぺらな警句になるおそれが多分にあるはずである。それなのに論語という本は断じてそんな弊におちいる気配がないどころか，平凡にみえながら決して平凡でなく，簡単なようで深い意味を，すなおに言いきっているのである。したがって論語のことばの背後には，よほど洗練された人間がいるにちがいないと考えられるのである。そして論語が二千五百年もの長いあいだ多くの人間をひきつけてきたのは，何よりも孔子のことばのはしばしにまであふれてくるこの博大高遠をきわめながら，しかも温厚でしたしみやすい孔子の人間性であったとおもうのである。

孔子のいう「道」すなわちある思想なりあるいはある主義なりが一つの社会を支配し，一つの国に行きわたり，さらに時代をとばして国境をこえ，全世界に普及する原動力はどこにあるのであろうか。孔子は，それはその思想・主義を支持する人の人格に存するとしたのである。一つの思想あるいは主義は，その創設者の人格のあらわれとして意味があるのであって，その思想・主義は究極において，そこに表現されている人間性に依存しているとしたのである。この孔子の考え方は，そのまま論語の場合に適用されるのであって，孔子は自分の人間性をもってして，二千五百年ものあいだ東洋の思想界を支配したのであった。孔子によってつくられた儒教とよばれる思想の勝利は，まさしく論語を一貫してささえている孔子の偉大な人間性のおさめた勝利なのである。

儒教は孔子からはじまり，多くの流派に分裂されていったが，儒教思想のすべての性格は，孔子によって確立された人間性の完全な実現という，究極の目的から派生したものと考えることができる。孟子とか荀子とか思想の表現がたがいにちがっていても，その根本はみな孔子の偉大な人間性というところにおちついてしまう。では孔子の思想とは何かといえば，ひとくちでいうと，人間の本性は善だと規定し，その人間性の完全な実現をねがうもの，ということになろうか。二千五百年たった現在でも，人の世に良識が大切なのはいうまでもなかろう。ともすれば良識をわすれ，自分勝手な行動をとりがちな今の僕たちに，孔子の言葉は千金の重みをもって，ひびいてくるのである。

儒教ということば自体が，僕たちには古めかしく，かたぐるしく聞こえる。ニーチェをよんでいるとか，カミュをよんでいるとかは言えても，論語が愛読書だ

などとはとても言えない雰囲気さえある。しかし，以上のような孔子の人間性にふれることはプラスにこそなれ，マイナスになるとは思わない。僕たちの道徳の原点であった，そしていまも無意識的にそうであるにちがいない孔子を，僕たちはもう一度読みなおしてみることが必要だと思うのだが。

易性革命って　何だろう

4C　猪　狩　純　一

孟子の思想が，現代にも通ずるような実践的なものであるということで，よく

孟子＋マルクス＝毛沢東

と言われている。この孟子の実践的理論のひとつとして易姓革命があげられると思う。

易姓革命は，本来，王朝の更迭を説明する理論であり，形態として禅譲と放伐のふたつがあった。

孟子は禅譲を易姓革命の本質とし，王道を説いた。そして王道を主張するために堯，舜などという伝説上の聖天子を取り上げて，武力をもって天下を支配しようとする放伐，即ち覇道を否定したのであった。

しかし，実際，歴史というものは，これまで常に覇道によって展開してきたのであり，王道政治というものは，盛んにさけばれはしても殆んど皆無に等しかったのではないだろうか。ともすれば，周の武王が殷の紂王を伐った時のように覇道をさも王道であるかのようにカモフラージュするようなことになる。

そこで私は，孟子の易姓革命は現実性は帯びていても何か理論倒れのような気がしてならなかった。ところが現在の世界各国の首脳者，例として日本に関して言えば，内閣総理大臣は，何も戦争をして位についているわけではない。その点，放伐とは考えられない。総理大臣を孟子のいう天子であるとすれば，禅譲により位についているのであると考えられる。

しかし，現在の日本の総理大臣に天子の資格があるかというと決してあるとは言えないだろう。仮に現在の首脳である福田首相に徳があり，前首相の三木氏からの推薦があったとしても，天子になるための第三条件である天からの確認がないのである。天からの確認，即ち民生の安易に帰着するところの政治の実際がよろしくなければ決して天子であるとは言えないのである。そこで国民は，早く

首相＝天子

となって国民皆が安心して暮せるような国にしてもらいたいと考えるようになる。こうしてみると，孟子の易姓革命は単なる理論ではなく，世界の人々の共通の願望でもあるわけである。

ところで儒教思想が日本に渡来した時，「仁政」や「五倫の精神」は伝わっても易姓革命の理論は受け入れられなかったという。なぜか，それは，日本に古くから存在する天皇制のためではなかったかと考える。もし，日本に易姓革命の理論が普及していたら，戦国時代などという戦乱の世はおとずれないで，時代は，もっと良い方向に移っていったのではなかったろうか。これが，私の易姓革命に対する感想である。

「人間の証明」を求めて
「獄門島」の「八つ墓村」まで
（1年生夏休みの読書調査）

1．調査のいきさつ

夏休みにはいる前には何ら特別の指示をわざとしないで，ありのままの状態をつかんで見ようとした。

9月初めに，紙片を渡して，凡そ単行本と名のつくものを何でも（但し漫画・劇画・符号数式を主としたものを除いて）読みかけのものも，書き出させた。なお正確を期するため，姓名も記入させた。

中学3年生時代は受験勉強で手一ぱいだったと思われるし，入学直後の一学期間は毎日の学校生活で無我夢中であったろうから，ここに明らかにされた実態は，中学時代の読書習慣の延長であり，また一面，家庭の読書的環境の反映である，と見ることができよう。

このままのデータと，ここに表われたレベルとは，ほめるにせよ，けなすにせよ，今後5年間の指導および自己形成の出発点として認めなくてはならない訳である。

2．結果のあらまし

1）夏休み40日間，一ページも本らしい本を開かなかったという学生は

M－42人中，0人　　E－41人中，4人
C－42人中，2人　　土－36人中，4人
合計，161人中，10人　約6％

2) 主な分野ごとの述べ冊数は

①文芸（創作・記録を含む）
　日本 ― 175
　外国 ― 55　} 230

②推理小説・ＳＦ
　日本 ― 130
　外国 ― 31　} 161

③数理工学・自然科学―51

④趣味娯楽（音楽も）―33
⑤スポーツ（運転も）―25　} 58

⑥哲学心理人生論　―13

⑦語学 ― 3　　⑧実業経済 ― 4

文芸
推理
数理工
娯楽等
哲心
他

3) ベストテン的にあげると

①作品では（数字は，読まれた回数）

人間の証明（森村）	10	青春の門（五木）	6
どくとるまんぼう航海記（北）	6	老人と海（ヘミングウェイ）	5
八つ墓村（横溝）	5	獄門島（横溝）	5
坊っちゃん（漱石）	4	船乗りクプクプの冒険（北）	4
宇宙のあいさつ（星）	4	おのぞみの結末（星）	4
ソクテラス最後の弁明（小峰）	4	武器よさらば（ヘミングウェイ）	4
宇宙戦艦ヤマト（石津）	4		

②作者では

星　新一	36	横溝正史	29
北　杜夫	18	夏目漱石	15
森村誠一	12	ヘミングウェイ	12
五木寛之	11	アダムスン	9
小峰　元	8	松本清張	7

3. 思い当たることども

1) 本らしい本を手にとらないでも夏休みを暮らせる学生がいる，ということだけでも驚きである。このことからも，読書環境・習慣の点で未開野蛮の状態にあることが察せられる。

2) 常識的に認められている良書，名著，必読書というものの顔振れさえまだ知らない段階にあると思われる。特に外国文芸についてそれが甚しい。

3) 入門書，実用書の類が多いのは必ずしも非難すべきではないが※一面，教養，心の糧のために本を読むという観念がまだ育っていないようである。

4) その反面では，世俗の流れに敏感に感応し，また享楽的なおとなの好みに，あるいは，ベストセラーにひきずられる傾きもある。青年前期の混沌とした精神段階を反映しているわけであろう。

5) 以上のことからして，目の前の実利実益を離れて，壮大な，息の長い，一流の著作をむさぼり読んで，魂の根底を養おうという，この年頃でなければ期待できない読書の目を，ぜひとも養わせる必要がある，と改めて痛感した次第であった。

4. 読んだ本のすべて

本校の歴史の上で，昭和某年某月における１年生のまぎれもないモニュマン（記念碑）として，煩をいとわず，以下に枚挙してみることにする。（書名の次の数字は回数）

1) 文芸　①日本

鴎外	高瀬舟
左千夫	野菊の墓２
漱石	三四郎３，坊っちゃん４，吾輩は３こころ２，それから，門，二百十日
藤村	破戒
直哉	和解
実篤	愛と死３，友情２，幸福者２，真理先生少年の日の思い出
潤一郎	春琴抄
芥川	鼻３，虱，トロッコ，くもの糸
有三	路傍の石２
賢二	注文の多い料理店
康成	千羽鶴２，伊豆の踊子
鱒二	黒い雨
秀雄	ゴッホの手紙
健作	赤蛙
多喜二	蟹工船
辰雄	美しい村，風立ちぬ
達三	青春の蹉跌２，蒼氓
太宰	桜桃，斜陽，人間失格，苦悩の年鑑
佐々木邦	いたずら小僧日記，おてんば娘日記
洋次郎	若い人，日のあたる坂道，何処へ，寒い朝
竹山	ビルマの竪琴
三島	潮騒，青の時代，午後の曳航
井上	あすなろ物語２，明日来る人，天平の甍
阿川	雲の墓標２
若杉	青春前期
司馬	国盗り物語２，竜馬がゆく

※（もっとも，３冊読んだ本が皆，「マージャンの手びき」のたぐいという剛の者もいた。）

戸　川	高安犬物語，動物文学(一)
新　田	八甲田山……2，富士山頂
綾　子	病めるときも，道ありき，塩狩峠
愛　子	こちら二年A組
瀬戸内	煩悩夢幻
悦　子	二十才の原点
恵　子	恋のテキストブック，スプーン一杯の幸せ
安　岡	ソビエト感情旅行
遠　藤	第三ユーモア小説集2，海と毒薬，白い人黄色い人
庄　司	喪失
ひさし	青葉繁れる2
五　木	青春の門6，コガネ虫たちの夜2，変奏曲，幻の女，地図のない旅
杜　夫	航海記6，船乗りクプクプの冒険4，昆虫記2，青春記，小事典，あくびノート，白きたおやかな峰，幽霊，高みの見物
えりか	木馬がのった白い船，妖精たち，でかでえ人とちびちび人
余次郎	よく遊びよく遊べ，いたずらコンビ
もとか	童話集，冬の旅
伊　丹	ヨーロッパ退屈日記
豊　田	にぎやかな未来
秋元文雄	どっちもどっち，劣等生クラブ，親不幸通い
集英社	女性，純愛一路
池　田	エーゲ海に捧ぐ2
(？)	黒部の太陽，シベリヤ日本人捕虜収容所友情設計，ある愛の詩
(？)	十七才の夢，風が答えた，お気にめすまま古典落語2，日本昔話集，新書太閤記，平家物語

＜詩集・歌集＞

啄　木	一握の砂，悲しき玩具
高　村	智恵子抄2
宮　沢	詩　集
高　見	死のふちより
俊太郎	詩　集
吉　野	詩　集
小　椋	渡良瀬逍遥
みつはし	愛のスケッチブック

(戦記)

太平洋戦争，クルスの大戦車戦，大脱走，零戦，撃墜，連合艦隊の栄光，戦艦武蔵

☆猫からエーゲ海に至る，振幅(バラツキ)の余りにも大きいことよ。

＜外国文芸＞

(英米)

武器よさらば4，老人と海5，ヘミングウェイ短篇集2，日はまた昇る，かもめのジョナサン2，永遠のエルザ2，野性のエルザ2，わたしのエルザ2，エルザの子供たち，十五少年漂流記，嵐が丘，あしながおじさん，オーヘンリー短篇集，風と共に去りぬ，大地，チップス先生さようなら，不思議の国のアリス，赤い小馬，くたばれチビッコ，野性の呼び声，理由なき抵抗，遥かなる橋，ある愛の歌

(ドイツ)

車輪の下3，アンネの日記2，若きウェイテルの悩み，変身，西部戦線異状なし

(フランス)

告白録，女の一生，赤と黒，ジャンクリストフ，禁じられた遊び，愛と同じぐらい孤独，ランボー詩集

(ロシヤ ソビエト)

戦争と平和2，アンナカレニナ，罪と罰，桜の園，イワンデニソビッチの一日

(他)

デカメロン

☆壮大深刻な外国物は，量・質ともに貧しい。読書に何を求めているか，発達段階にもかかわる現象。

② 推理小説・SF

(日本)

横　溝	獄門島5，八つ墓村5，悪魔の手まり唄4，悪魔が来りて笛を吹く2，金田一耕助の冒険2，殺人鬼，黒らん姫，さるすべりの下にて，ゆうれい男，悪魔の百しん譜，夜の黒豹，びっくり箱殺人事件，しんきろう島の冒険，仮面舞踏会，三つ首塔，毒の矢
乱　歩	乱歩集2，屋根裏の散歩者，吸血鬼，黒とかげ，白髪鬼
新　一	宇宙のあいさつ4，おのぞみの結末4，マイ国家3，ようこそ地球さん3，午後の恐竜3，悪魔のいる天国3，妖精配給会社2，ボンボンと悪夢2，ぼっこちゃん2，お城の人2，おかしな先祖2，ホラ男爵現代の冒険2，ひとにぎりの未来，

	きまぐれ指数，きまぐれ博物誌，声の網
森　村	人間の証明10，新幹線殺人事件，雪のほたる
小　峰	ソクテラス最後の弁明4，アルキメデスは手を汚さない2，パスカルの鼻は高かった2，
清　張	点と線3，影の地帯，神と野獣の日，聞かなかった場所，鷲は舞いおりた
眉　村	ねらわれた学園2，泣いたら死がくる，地球への遠い旅，なぞの転校生，わがセクソイド
小　松	夢からの脱走，エスパイ，地球のはてまで，物体0
筒　井	西遊記＋α2，家族八景，にぎやかな結末
高　木	刺青殺人事件
信　彦	オヨヨ大統領の悪夢
佐　野	一本の鉛
大　藪	マンハッタン核作戦
赤　江	罪喰い
モンキパンチ	一宿一飯
光　瀬	夕ばえ作戦
石　津	宇宙戦艦ヤマト4
？	寄生宇宙人の陰謀，地下時限倉庫の機密，地球の滅びる日，天才はつくられる，ロボット犬の叛乱，その列車を止めろ

（外国）

ドイル	マラコット深海，毒ガス帯，四人の署名，まだらの紐，シャーロックホームズの回想
ルブラン	ルパン傑作集
ポー	黒猫
クリスチー	大空の死，アクロイド殺人事件2，オリエント急行殺人事件
エラクイーン	七十七署シリーズ
ブラームス	吸血鬼ドラキュラ
ハミルトン	宇宙帝王，太陽系七つの秘宝，時のロストワールド
ウェストレーク	ジミーザキッド
マクベーン	レディキラー
マイシュベール	笑う警官
ブッツオー	ゴッドファーザー
コロンボシリーズ	死のクリスマス，意識の下の映像
？	猿の惑星，女王陛下のラブレター，スカイラーク7号，ソクテラスの陽とともに，時に忘れられた人々，緑の星のオデッセイ，霧の国，宇宙からの脱出，エアチェック

☆怪奇＋推理のにぎやかさよ。数年前の一年生は，これほどではなかったが。

③数理工学・自然科学

（数学）6

数学の楽しさ，楽しい数学，ひとりで学べる数I
いろいろな幾何学，非ユークリッド幾何学，
無限の話

（物理）34

新しい物理学，新物理パズル，物理質問箱，
物理上（原島），物理の世界のドラマ，
おもしろい物理学，続々おもしろい物理学，
物理の法則はこうして発見された，物理学の基礎，
物理論はどのようにしてなされたか，
物理パズル入門2，重力のなぞ，相対性理論はむずかしいか，飛行機はなぜ飛ぶか2，
人間航空史，電気に強くなる，ラジオの製作，
初歩のラジオ，上級アマチュア無線入門，
上級ハムになる本，BCLマニア，プルートーンの火，
半導体の話，電気ABC，電気の歴史，
ラジオの製作，シンクロスコープの取扱い方，
オーディオ知識150，オーディオ入門，短波の聞き方，
物理の世界（湯川）

（天文）9

宇宙とはなにか，宇宙と星99の謎，
天文学のすべて，やさしい天体・気象学，
天体観測ハンドブック，星座ガイド秋冬篇，
星座への招待，ブラックホール，
見る月見られる月

（他）

ダイヤモンドを追う科学者たち，
モンシロチョウの結婚指輪，
日本人はどこから来たか，人間と自然について

☆最も苦にしている科目，物理に関心が集まるのは無理のないところ。

④趣味・娯楽・芸術

山岳画の描き方，写真入門，ビートルズの本（立川）2，ビートルズの事典，ビートルズの栄光，
世界の民謡を訪ねて，打楽器のテクニック，
音楽的才能，鉄道模型，フォーミュラーカー，
フォーミュラーワン，鉄道旅行術，周遊券の旅，
旅のABC，コーヒー入門，磯釣入門，
川釣入門，ピストル，詰将棋百戦，ルアー入門，

必勝の詰手，　先手必勝，　トランプ入門，
トランプ占い，　麻雀入門４，　早おぼえ麻雀，
初心者のための麻雀入門，
ぜったいに振り込まない方法

⑤スポーツ・二輪車

甲子園野球，　威力の野球（牧野），　野球ルール，
学生野球，　バスケット入門，　バドミントン入門，
軟式テニス教室，　TABLE TENNIS，
強くなる卓球，　ペレーのサッカー，　ペレ自伝，
柔道入門，　空手入門，　中国拳法入門，
大相撲大百科，　長距離走者の孤独，　ヨガ入門，
ヨガのすすめ，　知られざる健康法，
原動機付自転車受験のための本，原付免許教本，
原付免許合格教本，　原付免許合格への早道，
だれでもとれる自動二輪免許，
オートバイ技能試験合格法

☆高専「入門」期とはいえ，よくも入門書がそろったもの。つまみ食いに終わらぬよう，ご用心。

⑥哲学・心理・人生論

人生論（トルストイ），　甘ったれるな（松平），
道は無限にある（松下），　ゲーテの言葉，
心理学入門，　読心術，　おばけの本，
恐怖の黙示，　かいまみた死後の世界，
四次元の世界，　ノストルダムの大予言者，
リンカーネーション

⑦語　学

日本語の技術，　ドイツ語の新しい学び方，
ロシア語の新しい学び方

⑧実業・経済

日本経済を考える，　怪物商法（糸山），
海外製品で儲けよう，　海外で儲ける智恵と勇気

☆糸山英太郎先生まで，早くも顔を見せるとは。

（国語科　池田　豊）

新着図書目録

※印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　記

朝日新聞縮刷版　52－4月～7月　朝日新聞社※

東洋文庫
- 308　斐郎紀聞 2　平凡社※
- 309　調象函解集　無言道人雑記　同　※
- 310　ホスローとシーリーン　同　※
- 311　歴代名画記 2　同　※
- 312　本朝食鑑 2　同　※
- 313　お経様　同　※

いわき地方史研究会編
- いわきの伝説と民話　いわき地方史研究会※

草野日出雄
- 写真で綴るいわきの伝説　はましん企画※

中国古典新書
- 幽夢影　明徳出版
- 周易参同契　同

向坂逸郎
- 読書は喜び　新潮社※

図書館ハンドブック編集委員会編
- 図書館ハンドブック　日本図書館協会※

日本図書館協会
- 日本の図書館　1976年　同　※

東京大学公開講座
- 10　人間と機械　東京大学出版会※

哲　学

- オルテガ著作集　1～6　白水社※

中村元選集
- 20　中世思想　上　世界思想史 4　春秋社※
- 21　同　下　同　5　同　※
- 22　近代思想　上　同　6　同　※
- 23　同　下　同　7　同　※
- ベルグソン全集 7, 8　白水社※
- 東西思惟形態の比較研究　東京書籍

安丸良夫
- 日本の近代化と民衆思想　青木書店

日本思想大系
- 19　中世神道論　岩波書店

トマスアクイナス
- 13　神学大学　創文社

蛭沼寿雄 他
- 原典新約時代史　山本書店

J.A.L シング
- 狼に育てられた子（野生児の記録 1）　福村出版

希和対訳脚註つき新約聖書
- 1　マルコ福音書　山本書店
- 8　ローマ人への手紙　同
- 9　パウロ獄中書簡　同
- 10　ヘブライ人への手紙　同

石原謙　キリスト教の源流　岩波書店
- キリスト教の展開　同

ヴァイシェーデル
- 思索への 34階梯　上　下　公論社

I.D サティ
- 愛憎の起源　黎明書房

山田晶　アウグスティヌスの根本問題　中世哲学研究 1　創文社

ウォルフガング.E.バックス
- イエスの歩いた道（図説聖書の世界 1）　学習研究社
- 堀一郎著作集 1　未来社※

Eugene Kennedg
- The Trouble Book　Thomas More Press

Stephen Mackenna
- Plotinus The Enneads　Faber

歴　史

林屋辰三郎編
- 化政文化の研究　岩波書店

林健太郎
- プロイセン・ドイツ史研究　東京大学出版会

G.B.サムソン
- 日本文化史　東京創元社

斯文会編
- 日本漢学年表　大修館書店
- 三田村鳶魚全集 1, 4, 5, 9, 12, 15, 17～27　中央公論社

図説中国の歴史
- 3　魏晋南北朝の世界　講談社※
- 同　同
- 4　華麗なる隋唐帝国　同　※
- 同　同
- 5　宋王朝と新文化　同　※
- 同　同
- 6　遊牧民族国家・元　同　※
- 7　明帝国と日本　同　※

日本の山河
- 47　天と地の旅　北海道　上　下　図書刊行会※

江戸時代図誌
- 7　奥州道一　筑摩書房※
- 同　同
- 10　中山道一　同　※
- 同　同

19 山陰道　同 ✣
岡　同
日本庶民文化史料集成
13 芸能記録 2　三一書房✣
講座比較文化
5 日本人の技術　研究社
山口恵一郎
地名を考える（NHKブックス286）
日本放送出版協会✣
日本都市生活史料集成
1 三都篇 1　学習研究社✣
岩波講座日本歴史
23 現代 2　岩波書店
26 別巻 3 日本史研究の現状　同
秋元松代
雪江貴澄（朝日評伝選14）　朝日新聞社

社会科学

古川哲史
日本道徳教育史　有信堂
就職対策研究会編
大学卒常識問題　高橋書店
森野澄　なさけの系譜　六興出版
木村敏　日本人の深層心理「いえ」社会の危機
創元社
有地亨　近代日本の家族観　明治篇　弘文堂
安永寿延
日本における「公」と「私」
日本経済新聞社
桜井徳太郎
霊魂観の系譜　筑摩書房
吉寺雅男
日本人の生活意識と道徳　法律文化社
あかね会編
平安朝服飾百科辞典　講談社✣
依田浩　技術者のOR入門　朝倉書店✣
松田正一
オペレーションズリサーチ入門　広川書店✣
K.U.ガッチ
学校カウンセラーの役割と実務　学苑社
都市問題研究会編
都市問題研究　Nol 11～19 No1～12
1959～1967　文生書院
世界の女性史
5 自由の国の女たち　評論社✣
13 東方の輝き　同 ✣
16 儒教社会の女たち　同 ✣
世界教育史大系
34 女子教育史　講談社✣
39 道徳教育史　同 ✣
日本教科書大系　別巻　往来物系譜
講談社
同　別巻　続往来物系譜　同
青木恵一郎
世直しの唄　（三省堂新書129）　三省堂
NHKブックス
288 人口問題の時代　日本放送出版協会✣
289 環境アセスメント　同 ✣
大学用就職常識対策　増進堂

自然科学

J.Mケイ
流れ学　基礎と応用　培風館
伊東俊太郎
文明における科学　勁草書房✣
森康夫　熱力学概論　裳華房✣
湯川秀樹自選集
1 学問と人生　朝日新聞社✣
2 素粒子の謎　同 ✣
3 現代人の知恵　同 ✣
4 創造の世界　同 ✣
5 遍歴　同 ✣
Francis Fchen
プラズマ物理入門　丸善
O.J.ダン
応用統計学　森北出版
森田優三
新統計概論　日本評論社
竹内啓　数理統計学　東洋経済新報社
無機化学ハンドブック編集委員会編
無機化学ハンドブック　新版　技報堂
常用化学便覧編集委員会編
常用化学便覧　誠文堂新光社
万能数表編集委員会編
東成万能数表　森北出版
Snyder 高速液体クロマトグラフィー
東京化学同人
高橋金三郎
化学入門　新生出版
日本物理学会編
プラズマと核融合　丸善
W.H.ギート
工科系のための熱物理学 1.2.　みすず書房✣
パワー社出版部編
単位　記号　パワー社✣
建設省河川局編
雨量年表　昭和50年第23回　日本河川協会
荒木綱男編
化学標準問題と解説　技報堂
共立化学ライブラリー
1 液晶　共立出版✣
2 エントロピー　同 ✣
7 水　生命のふるさと　同 ✣
吉屋善正
流体力学　I 基礎編　同
同　II 粘性流体論　同
新実験化学講座
9 分析化学 1.II.　丸善
現代化学シリーズ
57 NMR入門　東京化学同人
権原稔　大地を測る（出光科学叢書11）　出光書店
新しい機械工学
1 わかりやすい熱力学　森北出版
谷内俊弥 他
非線形波動　岩波書店
宮本健郎
核融合のためのプラズマ物語　同
世界科学大事典
1 アーウチ　講談社✣
2 ウッ～カカオ　同 ✣
3 カカタ～カン　同 ✣
4 キ～クソ　同 ✣
5 ケ～コウセ　同 ✣
6 コウソ～サイハ　同 ✣
7 サイヒ～シヤ　同 ✣
8 シュ～シンカ　同 ✣
9 シンキ～セイヒ　同 ✣
10 セイフ～ソン　同 ✣
11 タ～チュ　同 ✣
12 チョ～テソモ　同 ✣
13 テンヨ～ヌル　同 ✣
14 ネ～ハン　同 ✣
15 ヒ～フロセ　同 ✣
16 フロチ～マ*　同 ✣
17 マタ～ヨタセ　同 ✣
18 ヨタィ～ワン　同 ✣
19 索引　同 ✣
岩波繁敏 他
基礎力学演習　流体力学（2冊）実教出版✣
宮本敏雄 他
基礎数学ハンドブック　森北出版
守田宏　新版騒音と騒音防止　オーム社✣
J.フオン.ノイマン
自己増殖オートマトンの理論　岩波書店
安宅彦三郎
ブール代数　共立出版
T.L.Hill
化学系　生物系の熱力学　東京化学同人✣
藤井旭　天体写真教室　誠文堂新光社✣
R.L.F.Boyd
宇宙空間の物理　丸善✣
竹内啓　線形数学　補訂版　培風館
東京工学研究会編
実用図解数量算出公式　工学出版
春日屋伸昌
わかる測量のための数学概説
東京法経学院
荻野典夫
初歩者のための化学入門　オーム社
亀谷哲治
有機合成化学 I.II.　南江堂
一瀬正巳
誤差論　培風館
橋本吉郎
最新化学語辞典　三共出版
山本陽　化学式，化学記号の読み方書き方
オーム社
西山降造
図解初めて化学の実験をする人のために
同
緒方章　化学実験操作法　南江堂
入谷信彦
入門分析化学　同
戸川信人
数値計算入門　オーム社
東京大学教養学部化学教室編
化学実験　東京化学出版会
白井道雄
物理化学　改訂版　実教出版
谷口雅男
物理化学入門　オーム社
武者宗一郎
分析の基礎技術　共立出版
押田勇雄
熱力学（基礎物理学選書7）　裳華房✣
機械工学大系
28 ガス力学　コロナ社✣
森下郁子
川の健康診断（NHKブックス290）
日本放送出版協会✣
物理工学実験
6 電子回路技術　東京大学出版会
応用数学講座
7 数値計算　コロナ社
Martin Bates
Nucleus General Science Longman

Bela S Z-Nagy
Hilbert Space Operators and Operator Algebras North-Holland
Ronald Larsen
Banach Algebras
Marcel Dekker
A.V.S Korohod
Integration in Hilbert Space
Springer-Verlag
S.Helgason
Differential Geometry and Symmetric Spaces Academic Press
Milton Abramowity
Hamdbook of Mathematical Functions Dover
Wieslaw Zelazko
Banach Algebras Elseuier
Tosio Kato
Perturbation Theory for Linear Operators Spring-Verlag

工学・技術

日本材料学会編
金属材料強度試験便覧 養賢堂
コンピュータ基礎講座
2 アルゴリズム理論入門 昭晃堂
5 順序回路論 同
10 教育情報概論 同
18 符号理論 同
金属表面工業全書
1 金属表面物性 槙書店
4 金属メッキ技術 同
現代弾性力学 オーム社
最新機械工学シリーズ
8 水力学 森北出版㊥
14 材料力学 1 同 ㊥
15 同 2 同 ㊥
機械工学大系
3 制御と振動の数学 コロナ社㊥
7 金属の疲れと設計 同 ㊥
27 エネルギ変換工学 同 ㊥
32 ロケット工学 同 ㊥
理工学海外名著シリーズ
20 工学のための力学 上 丸善㊥
21 同 下 同 ㊥
機械工学講座
21 ガスタービンおよびジェットエンジン 共立出版㊥
機械工学基礎講座
8 機械力学 朝倉書店㊥
建部恒彦編
鉄道防災施工法 上（土木施工法講座17-1） 山海堂
Philip Hodge Jr
構造物の塑性解析 コロナ社
佐野元 機械材料（標準工学シリーズ34） 共立出版
機械実習研究会編
新編機械実習テキスト 1.3. オーム社
斉藤二郎
NC加工のトラノマキ（技能ブックス14） 大河出版
電子科学シリーズ
45 サーボ機器の実際（オーディオ ビデオ〜の応用） 産報
井戸剛 旅客機の科学（NHKブックス 287） 日本放送出版協会㊥
新産業と技術開発 通産規格協会㊥
公害防止の技術と法規（騒音編） 産業公害防止協会
鋼鉄道橋設計標準解説
第2回システムシンポジウム講演論文集 計測自動制御学会
システムシンポジウム講演論文集 同
海外研究開発レポート
定常流量に対する洪水量解析 J.T.R.A
都市問題における環境問題 特許技術資料センター
平歯車における荷重と歯の応力 学会サービスセンター
切削工具材料の開発と切削性能研究 材料技術資料センター
活性汚泥法の維持管理技術 科学技術開発センター
遊星歯車装置の最適機構解析 学会サービスセンター
技術評価の工学入門
河川管理施設等構造令関係法令例規集（昭和52年版） 日本河川協会
新訂版 測量技術者必携 測量実務ハンドブック 日本測量協会
測量計算範例集 新訂版 同
測量士 同士補 国家試験問題総合解説集 昭和52年版 同
測量関係法令集 同
測量用語解説 改訂版 同
国土基本図図式 同適用規程 昭和36年制定 同
国土基本図作業規程集 昭和36年制定 同
最新基礎設計施工ハンドブック 建設産業調査会
フロッピーディスク トリケップス
昭和52年度電子通信学会情報部門全国大会講演論文集 電子通信学会
同 半導体部門 同
昭和52年電気学会全国大会講演論文集 電気学会
JISハンドブック機械要素 1977 日本規格協会
土木学会編
土木学会誌 論文報告集総索引 縮刷版 1915〜1975 土木学会
国鉄新幹線建設局編
山陽新幹線岡山博多間工事誌 日本鉄道施設協会
技能教育研究会編
技能指導プレス加工 工学図書
日本塑性加工学会編
プレス加工便覧 丸善
橋本明 他
プレス作業読本 日刊工業
プレス絞り加工 同
平野進 技術英文のすべて 丸善
化学工学協会編
ケミカルエンジニア 東京化学同人
J.L.Hilburn
マイクロコンピュータ入門 科学技術出版
朝倉機械工学全書
20 切削工学 朝倉書店㊥
28 測定工学 同 ㊥
応用力学講座
16 流体力学 Ⅱ 共立出版
北川英夫 他
フラクトグラフィ（破壊力学と材料強度講座15） 培風館㊥
小西一郎編
鋼構 基礎編 1 丸善
瀬戸卓郎
旋盤実習 市ケ谷出版
建設省河川局編
流量年表 昭和50年第28回 日本河川協会
岡本舜三編
鋼構造の研究 技報堂
樋口芳朗
建設材料学 同
辻二郎 他
光弾性実験法 日刊工業
杉本礼三
応用力学演習 上 下 森北出版
渡辺昇 格子げたの理論と計算 技報堂
曲線げたの理論と計算 同
富山国之助
初歩の工業数学 理工学社
山口忍編
現場鋳造のテクニックス実例集 新日本鋳造協会
辻 茂 大学基礎 流体機械（3冊） 実教出版㊥
秋葉宏 マイクロプログラミング 産業図書
日本鋼構造協会H形鋼構造接合部特別委員会編
鋼構造接合部設計演習 技報堂
田島二郎
高力ボルト摩擦接合概説 同
J.F ノット
破壊力学の基礎（2冊） 培風館
R.K. リブスレイ
マトリックス構造解析入門 同
C.A.デソー
電気回路論入門 上 下 ブレイン図書
同 練習問題解説書 同
末松安晴
光ファイバ通信入門 オーム社
小西一郎 他
構造動力学 丸善
成岡昌夫
構造力学要論 同
中村斉治 他
ベルトコンベヤ ローラコンベヤ 文献社
岸田純之助
技術文明の再点検 日本生産性本部
シャープ㈱半導体事業部編
オプトエレクトロニクス ハンドブック オーム社
長尾義三
土木計画序論 公共土木計画論 共立出版
石橋多聞
上水道の事故と対策 技報堂出版
林一幹 他
新訂 増補 測量便覧 森北出版
NCハンドブック編集委員会編
NCハンドブック 日刊工業新聞社
山岸正雄
NC工作機械 同
溝淺亀一
材料力学演習 上 下 コロナ社
小西一郎
構造力学 Ⅰ.Ⅱ. 丸善
成岡昌夫
同 Ⅲ 同
R.H.ギャラガー
最適構造設計 基礎と応用 培風館

木原監修
塑性設計法　森北出版
日本測量機器工業会編
改訂増補最新測量機器便覧　山海堂
杉本昭典編
新下水道入門　水道産業新聞社
山田嘉昭
マトリックス法材料力学コンピュータによる構造工学講座 1－3A　培風館
鷲津久一郎
エネルギ原理入門（同）1－3B　同
A.I フィーサイス
コンピュータサイエンス入門　同
1　基礎編　同
2　応用編　同
3　FORTRAN編　同
建設省編
流域別下水道整備総合計画調査指針と解説　日本下水道協会
R.M. Dyke
NC機械工学　建帛社
板谷松樹
水力学　朝倉書店
小野浩二
研削仕上　槙書店
中部電気協会編
改訂送電工学 現場の手引1.2.　コロナ社
山崎俊雄 他
電気の技術史　オーム社
M.F. ルビンスタイン
新手法による構造力学　産業図書
ばね技術研究会編
ばねの設計　丸善
グレック
設計の設計　みすず書房
水沢昭三
技能指導　熱処理作業　工学図書
池田薫男
同　鋳造法　同
渡辺茂編
機械工学情報工学のためのプログラム例題集　共立出版
日本機械学会編
機械工学便覧　日本機械学会
土下水道機械事典編集委員会
上下水道機械事典　産業調査会
水沢昭三
技能指導　超硬バイトの使い方　工学図書
R.K. スプリングボーン
切削　研削砥粒　その選択と使い方　工業調査会
堀口博　有機工業化学論　技報堂
小堀為雄
応用土木振動学　森北出版
わかりやすい測量シリーズ
1　測量の基礎　水準測量　日本測量協会
2　三角測量　同
3　多角測量　同
4　地形測量　同
5　写真測量　同
6　地図調製　同
7　応用測量　同
8　測量誤差の処理法　同
9　同　と最小二乗法　別巻　同
測量実務叢書
1　測量計算法　産業出版会
2　トラバース測量　同
3　水準スタジア平板測量　同
4　三角天文測量　同
5　地形測量　地図調製　同
6　写真測量　同
7　路線測量　同
8　地積測量　同
エンジニアリング・サイエンス講座
1　工学と発明　共立出版
5　工学教室 1　同
12　場の工学　同
13　流れと熱の工学　同
28　固体の強度　同
29　エネルギー変換の工学　同
34　生物工学　同
新常識シリーズ
1　新水質の常識　日本水道新聞社
2　新下水道の常識　同
倉西正嗣
共立全書 71　応用弾性学　共立出版
日本道路協会編
道路橋示方書　同 解説　1共通編　2鋼橋編　日本道路協会
抜山四郎
隨筆心象歩道　開発社
冷えた湯たんぽ　同
倉西正嗣
弾性学　国際理工研究社
川田雄一
金属の疲労と設計　オーム社
吉澤武男編
新編JIS機械製図　森北出版
中山秀太郎
新材料力学　海文堂
ロバート.E.バー
機械の設計原理　産業図書
真島正市 他
計測法概論　上巻　下巻　コロナ社
富沢害谷
計測工学 I～III　森北出版
桑原道義
自動制御工学　制御用機器編　養賢堂
長谷川健介
制御理論入門　昭晃堂
坂井秀春
リーマとリーマ通し　槙書店
宮崎孔友 他
実践機械工作法　学献社
関谷英男
研削砥粒と難削加工　ジャパンマシニスト社
国尾武　固体力学の基礎　培風館
J.F. ノット
破壊力学の基礎　同
日本機械学会編
機械工学便覧　改訂第6版　日本機械学会
斎藤清一編
スーパーキャビテーション　槙書店
土木学会編
斜張橋資料集成　1976年2月　土木学会
大西清　機械の設計法　理工学社
杉田稔　機械材料の選び方使い方新版　日刊工業
児玉重幸
機械設計の基礎知識と活用　コロナ社
大西清　製図学への招待　理工学社
林喜男 他編
人間・機械システムの設計　人間と技術社
池田勝　船の種類　海文堂
村山奥編
航空工学概説　日刊工業
稲葉正太郎
自動車工学入門　朝倉書店
玄　忠　ひずみゲージ入門　コロナ社
山田圭一
現代技術論　朝倉書店
S. ギーディオン
機械化の文化史　鹿島出版会
浅沼強編
流れの可視化ハンドブック　朝倉書店
谷下市松
工学基礎力学　養賢堂
ノヴィコフ
工業熱力学　コロナ社
後藤佐吉
工学のための熱力学　朝倉書店
辻正一　燃焼機器工学　日刊工業
広田一寿
ボイラ用語事典　オーム社
R.W. ニコルズ
圧力容器工学　産報
プレス便覧編集委員会
プレス便覧　丸善
竹中利夫
油圧制御　同
日本図学会コンピュータグラフィクス委員会編
コンピュータによる自動製図システム　日刊工業
神野敏郎
コンピュータによる自動デザイン　同
金子敏夫
機械技術者のための図解サーボ技術入門　同
杉田稔　自動化機器の設計と製作　同
久津見森一
空気圧機器と応用回路　同
辻　茂　例題演習　油圧工学　同
塩崎義弘
空気圧駆動入門　コロナ社
通信電気学校教務部
電験第1種模範解答集　昭和52年版　電気書院
同　2－3種　同
横山亨　図解合金状態図読本　オーム社
金属表面技術協会編
金属表面技術便覧　改訂新版　日刊工業
石野亨　鋳造技術の源流と歴史　産業技術センター
不二越熱処理研究グループ
知りたい熱処理　基礎編　ジャパンマシニスト
谷山庸編
すぐ役に立つ鋳物入門　新日本鋳造協会
武智馨　鋳造工学概論　理工図書
Maruin E. Goldstin
Aeroacoustics　Mc Graw-Hill
V.V.Bolotin
Statistical Methods in Structural Mechanics　Holden Day
Edward G.Seidnsticker
Murasaki Shikibu The Tale of Genji　Alfrad A.Knopf
S.P. Timoshenko
Mechanics of Materials　Van Nostrand
J. Mc Allester
Electrical Engineers　Longmen

Fractography of Ceramics
TRS－8507　技術文献サービス
橋 Bridges in Japan 1975－1976
土木学会
Properties Related to Fracture Toughness　ASTM
Stability of the Developing Laminar Flow in a Circular Tube
サンケン技術
Pulsating Flow in a Curved Tube
同
Atheoretical and Experimental Investigation of the Stability of Pipe Flow with Respect to three－Dimensional Disturbances　同
Implicit Solutions of the Unsteady Navier－Stokes Equation for Laminar Flow Through an Orifice　同

芸　術

近世日本相撲史 1.2.
ベースボールマガジン社
新修体育大辞典　不昧堂
ヴェルナー・シュピース
マックス エルンスト美しき女庭師の帰還
河出書房新社
日向あき子
現代美術の地平（NHK ブックス 283）
日本放送出版協会
佐藤忠男
臣民心情のあかり　時事通信社
日本の仏画第2期
1　国宝阿弥陀二十五菩薩来迎図知恩院
学習研究社
2　国宝不動明王像曼殊院　同
3　国宝孔雀明王像　同
日本絵巻大成
1　源氏物語絵巻　寝覚物語絵巻
中央公論社
3　吉備大臣入唐絵巻　同
5　粉河寺縁起　同
6　鳥獣人物戯画　同
新修日本絵巻物全集
12　西行物語絵巻　当麻曼荼羅縁起
角川書店
14　法然上人絵巻　同
古寺巡礼京都
14　妙法院三十三間堂　淡交社
大和古寺大観
3　元興寺極楽坊　元興寺　大安寺　般若寺　十輪院　岩波書店
Martin Urban
Emil Nolde Landschaften
Verlag M.Du Mont Schauberg
Werner Haftmann
同　Ungemalte Bilder　同

語　学

松原博喜 他
姫路現代文完成演習　中央図書
吉田精一
研究現代国語　旺文社
岩淵悦太郎編
新版悪文　日本評論社
多田季親
英語副詞句活用辞典　大修館書店
林語堂　開明英文文法　文建書房
英語を上手に話すコツ
セイドー外国語研究所
英和中辞典　旺文社
松本安弘
あなたの英語診断辞書　北星堂書店
牛島徳次
中国古典の学び方　大修館書店
吉田精一 他
研究現代国語　旺文社
安井稔 他
形容詞　現代の英文法 7　研究社
荒木一雄
助動詞　同 9　同
国原吉之助編
中世ラテン語入門　南江堂
遠藤嘉基
現代文解釈の方法　三訂　中央図書
現代文解釈の基礎　四訂　同
川副国基
マイティ 現代国語　学習研究社
岩波講座日本語
1　日本語と国語学　岩波書店
3　国語国字問題　同
4　敬語　同
5　音韻　同
6　文法 1　同
7　同　2　同
8　文学　同
9　語彙と意味　同
勝俣銓吉郎編
新英和活用大辞典　研究社
新英和大辞典　同
新釈漢文大系
28　礼記　明治書院
藤堂明保
漢字入門（放送ライブラリー 9）
日本放送出版協会
Eleanor Harz Jorden
Reading Japanese
Yale University Press
Owen Watson
Longman Modern English Dictionary　Longman
Joan Morley
Listening Dictation Understanding English Sentences Structure
University of Michigan
6000Words A Supplement to Websters Third New International Dictionary　Merriam－Webster

文　学

司馬遼太郎
長安から北京へ　中央公論社
前野直彬
漢文珠玉選　上　下　平凡社
新田次郎
八甲田山死の彷徨　新潮社
澤野久雄
愛と死の抱擁　講談社
曽根博義
伝記　伊藤整　詩人の肖像　六興出版
朝澤輝吉
鑑賞佐久の草笛（佐藤春夫詩集）　学燈社
近代の文学
9　中勘助の文学　桜楓社
10　中島敦の文学　同
中島敦　同
菱川善夫
現代短歌美と思想　同
野田宇太郎
関西文学散歩　京都　近江篇（18 野田宇太郎文学散歩）　文一総合出版
斎藤茂吉全集 1～36　岩波書店
上林暁全集 1～3　筑摩書房
小林淳男
中世紀における英国ロマンス　南雲堂
菊地重三郎
木曽馬籠　中央公論美術出版
中村草田男
増補　俳句入門　みすず書房
宮口しずえ
木曽の街道嶋から　筑摩書房
池田正　十字架の夢　北星堂書店
高橋健二
ゲーテをめぐる女性たち　主婦の友社
永積安明
中世文学の可能性　岩波書店
大塚幸男
比較文学原論　白水社
高藤武馬
挑戦俳諧講義　筑摩書房
D. ドウラス
詩の言語学　朝日出版社
秋谷豊　抒情詩の彼方　荒地出版社
谷　鼎　新古今和歌集評解　有精堂
松尾靖秋編
俳句辞典近世　桜楓社
文学と史蹟の旅路
東海　北陸　学燈社
東京　同
京都　近江路　阪神　同
北海道　東北　同
奈良　大和寺　近畿南部　同
山陰　山陽　四国　同
関東　甲斐　信濃　越後路　同
串田孫一
追憶の山　自然と人間シリーズ 8
スキージャーナル
寺田透　義堂周信　絶海中津（日本詩人選 24）
筑摩書房
アララギ復刻版 第1中央～第3中央（第9巻1号～10巻12号　11巻1号～12巻12号　13巻1号～14巻12号）　教育出版センター
世界の文学
10　ゴンブローヴィッチ.シュルツ　集英社
15　ウィーウィルソン　同
23　シモン　同
27　ガッタ　同
ゴーゴリ全集
1　ガンツ.キュヘリガールテンディカーニカ近郷夜話　河出書房新社
4　戯曲　同

鑑賞日本古典文学

20 仏教文学 角川書店※

22 謡曲 狂言 同 ※

23 中世説話集 同 ※

30 浄瑠璃 歌舞伎 同 ※

明治文学全集

14 田口鼎軒集 筑摩書房※

54 伊藤佐千夫 長塚節 同 ※

Dorothy Eagle

The Oxford Litarary Guide to The British Isles Oxford

Donald Keene

World Within Walls

Holt Rinehart Winston